

音楽現代

The Chokkyu

Vol. 41

No. 12

December

12
クラシック音楽誌

特集

今、音楽批評(評論)を問う

音現アーカイブ

音楽批評の自立性を求めて

篠田一士+遠山一行+
大木正興+中村洪介+
船山 隆

創刊 500号



頑張ろう日本!

音現アーカイブ

吉田秀和「音楽批評を語る」

新連載

丹羽正明「音楽批評家の仕事」

特別企画

音楽界、ゆく年くる年

～年末年始のコンサート&全国「第九」公演日程

特別対談

フルトヴェングラーの人間と音楽(その3)

宇野功芳×野口剛夫

カラー口絵

ウィーン国立歌劇場日本公演「サロメ」「フィガロの結婚」

インタビュー

クリスチャン・ハンマー+山賀博之 東 誠三 長谷川陽子 他

訊き手 浅岡弘和 / 通訳 田辺とおる (オペラ監督)

— 今回のお話は田辺さんから山賀さんに持たせたそうですね。

田辺 はい、映画「ロード・オブ・ザ・リング」を観て、その人気沸騰ぶりにワグナーの方が元祖なのに何なんだこの差は！ と憤慨したのがキッカケです (笑) それで映像の専門家であり呑み友達でもある山賀さんに依頼しました。もう5年も前になります。

— ではあらかわバイロイト旗揚げより前なんですね。山賀さんにとってワグナーの魅力とは？

山賀 やつぱり矛盾ですね。矛盾がテーマのように表に出ている。偉大さと卑小さ。清純なものと汚れたもの。論理的にこうですという前に矛盾が前に出ているから実にわかりやすい (笑)。

— こういう暗黒面と崇高な部分が整理されないまま出てくる人は作家として興味があります。

— ニーチェとの大ゲンカはどう思いま

山賀 そう思います。あまりフィクションの世界には出せない人物ですね。

— もし出しても実物の方が面白い。

山賀 思いもよらぬことを始める (笑)。

— トリストラン等は小さいオペラを作ろうとして始めたのにああなった。

山賀 リングもそうです。ちよつと英雄の話をかこうと思つたら前の方に話がどんどん広がっていった (笑)。

— スターウォーズみたいだ。

山賀 僕は創作して広がるということに対して恐怖感がある。制御できないものに対して責任を取れないと感じる。

— ドイツでも日本のアニメ文化は有名でしょう。初めて組む感想は。

C・H 自分にとってアニメは全く白紙です。何が起るのか愉しみにしています。

— 3回目で第一作に戻るわけですが。

C・H 我々は既にワルキューレや黄昏を知っています。黄昏はモチーフが多すぎてインフレになっている (笑)。「黄金」では色々なモチーフを最初のクリアな形で紹介できるので新鮮です。リングは途中中断されたので黄金の作曲開始はローエングリン直後でスタイルがだいぶ違う。もちろん革命的なのは前奏曲で変ホ長調の和音を三分間ずつと流しつ放し。その後ラインの乙女たちのシーンです。からほとんどワグナーのオペレッタと

すか。

山賀 最初はニーチェの方がマツトウな感じがして、書いてるものを読んでもニーチェの方がきれいです。でもだんだんワグナーに親しむにつれ、ちよつと違ふかな。あんな臆ばつた人とはつき合えない (笑)。

— 本場の演出は変なものが多いです。

山賀 僕はラインの黄金しか勉強していませんが、フリッカとヴォータンの夫婦喧嘩に矮小化したりするのは良くないと思います。卑近で小さいものと宇宙みたいに偉大なものが一緒に語ってしまうのがワグナーの凄いとこです。フリッカは別に怖い奥さんではない。矛盾の枝葉が切られたためうんと小さな話になってしまふ気がします。

— ベルイマンの魔笛も夫婦喧嘩だし、この間はバルジファルを兄弟ゲンカにして普通のオペラにしてみました。

クリスティアン・ハンマー (以下C・H)

いえるのでは。

山賀 逆にモダンですね。映画が発明される前なのに映画的。クローズアップがない時代にあんな暗い舞台で指環を取り合うとは。地下に降りていく場面で植の響きが聞えて来て上へ上へいっていきうなイメージとか映画のカメラワークの世界だなど。そういった意味で前奏曲とラインの乙女の間も現代の演出と親和性が高いです。

— ライトモチーフはどうしますか。

山賀 最初は凄く気にしてましたが、色々考えてみたら音の世界でこれは完結しているから無理に合わせる必要はないと。あえてズラした方がいいかも。

— 音楽が全てを語っているからそんなに合わせる必要はないですね。

C・H ファゾルトがファフナーに殺される場面は合わせて欲しい (笑)。

山賀 あの巨人たちは合わせます。合わせた方がいい (笑)。

C・H ワグナー自身は作品を神聖なものというよりもつと普通に考えていた。畏怖の念が強すぎても駄目です。初演のワグナー自身の演出ノートがあるのですが歌手たちに向い、お前らがそんなに退屈にやらなきゃ黄金は2時間で終わるとある (笑)。神聖視して停滞するんじゃない、動きの中で解決していかなく



山賀博之

C.ハンマー

ワグナー自身はミンナとの夫婦喧嘩をちよつとイメージしているようですね (笑)。

— NHKの大河ドラマも女性の視点か矮小化して武將の話でなく家庭ドラマのようになってしまっている。

山賀 卑近なものに合わせるとドラマも面白くなる。

— 登場人物の心理もさつぱりわからないのに精神分析的解釈とか変に理屈をつける演出家が多いからつまらなくなってしまう。きつとワグナーという人間そのものにも理解しがたい二面性があったんでしょね。

ればいけない。黄金の中で非常に遅いテンポはほとんどない。

山賀 今回翻訳して初めて物凄いスピード感のある話だとわかりました。

C・H 黄金のスコアを見ると見通しよくオーケストレーションされています。ワグナーだつて大きな音ばかりではない。もちろん場面転換は大砲ですけど (笑) 歌の部分はそうではない。落差が大きいのが黄金の特徴です。

山賀 落差というかコントラストのあるものは演出側にとって養分ですね。ないものにつけるのは大変ですが最初からあるものはある意味楽です。映画より長いけれどスピード感のあるストーリー展開で長いと感じないです。

— 今回の演出の特色は？

山賀 できるだけ自然に考え何が表現されている場所なのか素直にやってみていく。あまり奇を衒うつもりはないです。基本的な方針は何を言っているのか何を描いているのかを明確にしたいと思つてます。

C・H まず私が真つ先に拍手します (笑) 演出はお客に何を物語りたいかです。曲が物語ろうとするものを物語るように努力するのと曲を聴いて自分が思つたことを物語ろうとするのは根本的に違うものではないでしょうか。

ガイナックス×コンドルズ×ワグナー

オペラ劇場あらかわバイロイト 第4回ワグナー音楽祭

ワグナー作曲 舞台祝祭劇「ニーベルングの指輪」序夜 **ラインの黄金**

11月23日14時、24日13時、18時、25日14時、東京・サンパール荒川大ホール

音楽総監督・指揮：クリスティアン・ハンマー 演出：山賀博之 (GAINAX) オペラ監督：田辺とおる

管弦楽：TIAAフィルハーモニー管弦楽団 振付：近藤良平

主要キャスト=田辺とおる、小畑朱美、木川田澄、小貫岩夫、羽山寛生、米谷毅彦、杉野正隆、ほか ダンサー：コンドルズ

東京国際芸術協会 TEL 03-3809-9712

山賀博之

演出家・ガイナックス代表。1984年、映画『王立宇宙軍オネアミスの翼』の企画開始と同時にガイナックスを設立。アニメフェアで行ったドイツで、ワグナー「ラインの黄金」を始めて見る。その後、ワグナー作品に傾倒、この5年間オペラ演出を研究。今回の「ラインの黄金」翻訳も一から手掛ける。監督作品として、テレビアニメ『まほろまでいっく』『アペノ橋魔法☆商店街』など。

クリスティアン・ハンマー

ハノーファー国立音楽大学ピアノ科及び指揮科卒。1990年・北ハルツ劇場第一指揮者へ、翌年劇場音楽監督。2002~09年・ロストック国民劇場第一指揮者。ロストック国立音楽大学指揮科・音楽科講師。1998年・MD (音楽監督) 称号授与。ドイツ・ワグナー協会会員。2012年《オペラ劇場あらかわバイロイト》及びTIAAフィルハーモニー管弦楽団の音楽総監督に就任。